

ジル・ドゥルーズによる「永遠回帰」概念の解釈について

——前期から後期への位置づけの変化

戸澤幸作(トゥールーズ第2大学)

本発表の目的は、「永遠回帰」概念に関するジル・ドゥルーズの解釈に関して、前期の主著『差異と反復』(*Différence et Répétition*, 1968)と後期の名著『シネマ』二巻(*Cinéma1*, 1983, *Cinéma2*, 1985)を比較検討し、両著作におけるこの概念の位置づけの変化について考察することによって、前期から後期にかけてのかれの哲学の展開と一貫性を解明するためのあるべき道筋の一つを提示することである。

フランス現代思想の代表的な哲学者の一人であるドゥルーズにとって、ニーチェとの出会いが特権的な意味を持っていたことはよく知られている。最初の主著『差異と反復』の主題である「差異」と「反復」が、まずもってニーチェの「永遠回帰」に関する教説に呼応するものであることは明らかである。それゆえ、これまで多くの研究者がドゥルーズにおける「永遠回帰」の解釈に着目してきた。ドゥルーズによる解釈の特徴は、一般的に言えば、次の二点に要約される。「永遠回帰」は、「異なるもの」の回帰であり、同一性や類似を払いのける「選別的」な性格を有する。「永遠回帰」における反復は同じものであるが、ただしそれは差異および異なるものについてのみ言われる限りにおいてである」(DR384)という主張は、『差異と反復』のなかで繰り返し論じられており、「永遠回帰」は「同じもの」の回帰ではないということは、その内実が十全に解明されたのかは別にしても、解釈者にとって、この書の理解の前提であり出発点となっている。例えば、代表的なドゥルーズ哲学の注釈者の一人である James Williams は、その著書 *Deleuze's philosophy of time* (2011)のなかで、「永遠回帰」を「即自的差異」のみを回帰させる時間の「解放性(openness)」を担保するものであるとまとめている(同書 116 頁)。

しかしながら、この書が私たちに戸惑わせるのは、「反復」という語によって「同じものの回帰」を論じていることである。諸芸術、物理学、生物学、精神分析等の私たちの現実を探究する諸分野において、しばしば「反復」が見出されるという事実が議論のモチーフとなり、その現実の根底に存する原理として、「異なるものの回帰」としての「永遠回帰」が据えられている。つまり、「反復」という同じ語によって異なる水準の事柄がその都度交錯しつつ論じられているのである。確かに、ドゥルーズは同書の第 2 章において、現在-過去-将来それぞれの時間性を基軸に三つの時間総合を論じることで、「反復」の三つの様態を区別している。けれども、この三つの総合の相互的な関係に関して、とりわけ過去から将来への移行については慎重な検討を要する。加えて、第 2 章で定式化された反復論が同書後半部分の「強度」や「特異性」の議論に適用される仕方は、必ずしも明快ではない。同書の包括的な注釈は本発表の企図ではない。しかし、「反復」が「差異」に関して言われることが繰り返し強調される一方で、その分析に用いられる事例は現実的な意味での「同じものの回帰」であり、この両者を架橋する「永遠回帰」という概念の位置づけに曖昧さを残していることが、この書を難解なものとする一因となっているのではないだろうか。

他方で、後期ドゥルーズ哲学の最も浩瀚な書である『シネマ』では、「永遠回帰」の位置づけが変更され、より明快な論旨が獲得されている。この著作において、ドゥルーズは映画史および映画作品の分析を通じて、『差異と反復』での課題に再度挑んでいるようにも見える。この著作の『差異と反復』からの顕著な変化は、ニーチェから受け継いだ二つの概念、すなわち「永遠回帰」と「力への意志」を分離したことにあると考えられる。『差異と反復』でのドゥルーズは、「反復とは、すべての差異の非

定形な存在であり、また表象が壊されてしまうような極限的「形式」にあらゆる事物をもたらす基底の持つ非定形の力能のことである」(DR166)として、「永遠回帰」と「力への意志」を即座に結びつけていた。もちろん、この両者が不可分の関係においてのみ理解されることは『シネマ』においても変わらない。しかし、この二つの概念を分離して論じることによって、現実的に反復現象が存在すること、その根底に存する肯定的「意志」、あるいは「偽なる力能」の次元をより明晰に区別し、さらに両者がどのような形で結びつけられるのかについて踏み込んで論じることに成功している。

では、こうした変化はドゥルーズ哲学においてどのような意義を持つだろうか。本発表は、時間論および存在論の枠組みにおける「信じる(croyance)」という概念の彫琢にあると考える。この概念もまた、『差異と反復』においてすでに鍵概念の一つとして用いられていた。ドゥルーズは同書冒頭で「私たちは、どの個体化も非人称的であり、どの特異性も前個体的であるひとつの世界を信じる」(DR4)と語り、さらに時間論の文脈において、将来という時間の原理である「永遠回帰」に関して、「永遠回帰は、ひとつの信仰ではなく、むしろ信仰の真理」(DR127)であり、「将来を信じること」(DR122)であると語っている。しかし、「反復」という語に異なる水準が重ね合わされている同書では、「信じる」という概念は、「信仰(foi)」との対比関係は語られるものの、曖昧な使用のうちで前景化することがなかった。けれども『シネマ』では、この「信じる」という概念こそが議論の中心に据えられる。「信じる」と「信仰」の関係、「不信」との関係等の検討を通じ、ドゥルーズ哲学の根幹を成す概念として「信じる」という語が彫琢されるのである。こうした「信じる」の前景化および明晰化を可能にしたのは、ニーチェ哲学へのアプローチの見直し、とりわけ「永遠回帰」概念の位置づけの変更であると考えられる。

本発表では、「永遠回帰」概念の位置づけに着目することで、前期と後期を代表する二つの著作の議論構成を比較検討し、両者を架橋するドゥルーズ独自の概念としての「信じる」を析出する。また、こうした検討を通じて、後期ドゥルーズ哲学の研究においては従来見落とされることも多かった『シネマ』を、かれの哲学を論じるうえで欠くことのできないものとして評価することを可能にする。